

# 暮らしの中の祈り

家内  
安全

商売  
繁盛

合格  
祈願

日本人は事あるごとに心の中で祈り、正月になると多くの人々が習慣のように初詣をして、家内安全や商売繁盛を祈ります。また、受験の前には神社仏閣で合格を祈ったり、スポーツの応援でも思わず手を合わせて勝利を祈ったりします。さらに、親しい人が病気や怪我をすると、快復を願って祈ります。このように祈りは、日本人にとって自然に身に付いたしぐさとも言えるでしょう。

今月の『ニューモラル』では、祈りについて考えます。

# 「私も一緒に祈ってあげよう」

中学三年生の小林佳代さんは、高校受験を間近に控え、近くの神社にお参りに行きました。お正月やお祭りのときに、家族と一緒に行く神社です。その日は二月の初めの寒い日で、境内には誰もいませんでした。シーンと静まり返っています。

佳代さんは心を整えて、拍手を打ち、静かに目を閉じ、手を合わせました。

「第一志望の高校に絶対に合格できますように……」

心を込めて真剣に祈りました。

お参りを終えて帰ろうとすると、参道の石段で近所に住む祖母の和子さんに出

会いました。和子さんは、「佳代ちゃん、お参りに来たの。偉いね。おかげがあるよ……。何をお願いしたの。私も一緒に祈ってあげよう」と言いました。



「ほんとう、おばあちゃん。うれしいな。あのね、もうすぐ高校の受験だから、合格のお願いに来たの」

「そうだったの。佳代ちゃんなら大丈夫。きつと高校に合格できるわ。実はね、私も毎日ここに来て、佳代ちゃんが高校に入れますようにと、ご祈願していたのよ」「えーっ、そうだったの。ありがとう、おばあちゃん」

自分のために、祖母が毎日祈ってくれていたことを知り、佳代さんはうれしくなりました。

二人は並んで社殿に向かい、佳代さんは再び静かに正面で手を合わせました。焦りと緊張と不安でいっぱいだった佳代さんの心は、温かく解きほぐされていくようでした。

# 「神様は何でもござ存じなんだから」

二週間後の合格発表の日。佳代さんは第一志望の高校に合格できませんでした。

「あんなに一生懸命に勉強したのに、真剣にお祈りもしたのに、どうして不合格だったんだろう」

佳代さんは、残念で、悔しくて、悲しくて、納得できませんでした。「おばあちゃんが毎日お参りしてくれたのに、どうして神様は言うことを聞いてくれなかったんだらう。神様って、あてにならない」と思いました。

夕方になり、気持ち少し落ち着いてきた佳代さんは、祖母の家に報告に行きました。

「おばあちゃん、第一志望が不合格だったの。せつかくお参りしてくれたのに、ごめんね」

「そう、残念だったわね。でも、あんなに気を落とさないでね」

「うん。まあ、ほかに合格した高校があるから」

「よかった。おばあちゃんは、佳代ちゃんにとって最もふさわしい高校に入れましようにと、祈っていたの。だから、合格した学校が佳代ちゃんにとって一番よい高校なんだと思うわ。何たって神様は



何でもご存じなんだから、その人のことを考えて、いい方向に導いてくださるの。その学校に行くと、きつといいことがたくさんあるわよ。元気を出してね」

「おばあちゃん、ありがとう」

佳代さんは、「おばあちゃんは、そんなふうにかけて祈っていたのか」と驚きながら、寒い日、祖母と一緒に神社にお参りしたときの気持ちを思い出していました。

「おばあちゃんは私のことを毎日、一生懸命に祈ってくれていたのに、神様はあてにならない」と神様に八つ当たりしたことを恥ずかしく思いました。佳代さんは、少しずつ現実を受け入れられるようになり、やがて、悲しくて残念な気持ちが消えていくのを感じていました。



# 美しい 祈りの姿

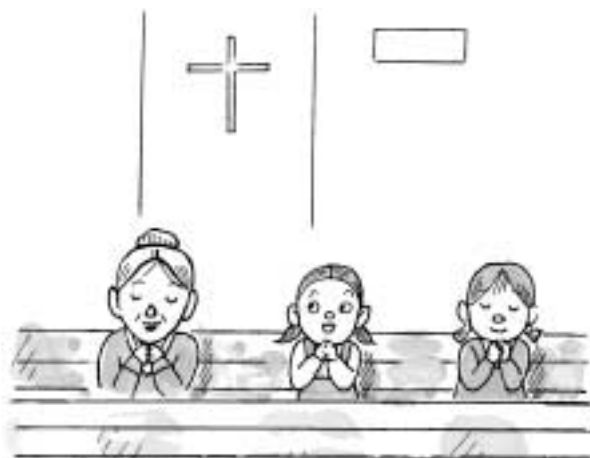
人は佳代さんのように、自分の夢をか  
なえてもらうために祈ることがよくあり  
ます。祈ることで落ち着きや安らぎが得  
られます。また、親しい人の幸せや夢の  
実現を祈れば、その人と喜びを分かち合  
うこともできます。

さらに祈りは、他人にも深い感銘を与  
えることがあります。次に紹介するの  
は、美しい祈りの姿に魅せられた人の話  
です。



福田悦子さんは、小学校六年生のとき、  
友人に誘われて教会の日曜学校に初めて  
行きました。海辺の町の小さな教会で、  
中に入るときれいな礼拝堂があり、その  
清らかさに見人つてしまいました。する  
と、上品な老婦人がすつと悦子さんの横  
に来て、「初めて来たのね。よく来たわ

ね。こちらにいらつしやい」と言つて、中ほどの席まで手を引いて行き、そばに座りました。その老婦人は静かに目を閉じて、頭を少し下げ、祈りはじめました。



悦子さんには、その祈りの姿が何とも言えず美しく思えました。透明とうめいでキラキラしていて、何の汚れけがもないという感じです。その姿から子供心にも深い感動が得られたのです。

悦子さんは、この世にこんな祈りがあるのかと驚きました。そして、それと同じに、「ああ、やつぱり神様は本当にいらつしやるんだな。こんな美しいお祈りをする人がいるんだもの。こんなお祈りができるように人間人間をお創つくりになつた神様って、すごいな」と思いました。

それ以来、神様のような大きな存在を意識し、いつも心の中で神様に話しかけたり、願い事をしたりしました。それは神様と悦子さんが、空と地上でつながっているという感覚でした。

# 祈りの姿を 子供に見せる

それから二十年後、悦子さんは結婚して女の子を授かりました。子育てのあり方に悩みはじめたころ、作家の瀬戸内寂聴さんの言葉に出会いました。

「ひと昔前なら、お年寄りには朝起きると神棚や仏壇にお供えをし、手を合わせて先祖や生命を紡ぐことへの感謝の気持ちを表したものだ。また、『食事の前に感謝の気持ちを込めて手を合わせなさい』とか『お米のなかには仏様がいらつしやるか

ら粗末にしてはいけない』とか、教えてくれもした。子どもたちは、お年寄りのそうした行為や教えから人間以外の不可思議な見えない大いなる者の存在を知り、感謝の気持ちや他者への思いやりの心を育んできた。……だから、悪さをして叱られるときも、『ご先祖様に申し訳ない』

と、仏壇や神棚の前だった」（『信仰の発見』——日本人はなぜ手を合わせるのか』水曜社）

「そういうえば、うちのおじいちゃんやおばあちゃんも言っていたな。「お天道様が見ているよ」とか、「世間様に顔向けできない」とか……」

悦子さんは何か大切なことに気づかされた思いでした。——自分は親祖先から命を受け継ぎ、自然の恵みや社会の人々の支えの中で生かされているんだ、と。





そうしたことへの感謝の気持ちを込めて、みずから手を合わせることで、娘に

も自然とその心が伝わっていくのではないかと考えました。

# 日に何度も 手を合わせる

悦子さんは、自分の祈る姿を娘に見せていこうと思うようになりました。子供が成長したとき、自己中心的な人間でなく、謙虚な心を備えた大人になってほしいと願いました。そして、小学生のころに海辺の教会で見た美しい祈りの姿を思い出しながら、日に何度も手を合わせました。

家の中でも、外出先でも、ありがたいことがあれば手を合わせて真剣に祈る。

時には短く、時には長く祈ることもありました。そういう姿を見せていくうちに、初めはわけも分からずただ隣に座って、手を合わせる真似事をしていただけだった娘の奈々ちゃんも、「何、お話ししてるの?」「何、お願いしてるの?」と聞いてくるようになりました。

そんなときは、「いつも神様やご祖先様がそばで見えていらつしやるのよ」「あなたのこともお母さんのことも、神様やご祖先様は守ってくださっているのよ」と話しました。奈々ちゃんが何かよいことをしたときには、「いい子ね、神様もきつと喜んでいらつしやるわよ」と言いました。そんなふうに接していると、奈々ちゃんが五歳になったとき、こんなことがありました。

いたずらをした奈々ちゃんに、「こんなことをして、お母さんすごく悲しいわ」と言うと、奈々ちゃんのほうから「神様も悲しんでいらっしやるかなあ」という言葉が返ってきたのです。「この子の心の中にはちゃんと神様がいる」と、悦子さんはうれしく思いました。

その夜のことです。パジャマ姿の奈々ちゃんが、ふとんの上になよこんと座ってつぶやいていました。そして、「今日もいっぱいいたずらをしてお母さんに怒られてしまいました。神様、どうかお許しください」と言っているのです。

それを聞いた悦子さんと彼女の夫は、顔を見合わせ、「これじゃあ叱れなくなっちゃうね。神様相手じゃ、太刀打ちできないよ」と言って、笑いました。



# お天道様を礼拝する



かつての日本人は、どんなときでもどんな場所でも一心に祈っていました。

明治二十三年に来日し、日本に帰化したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、当時の日本人の祈りについて次のように述べています（『神国日本——解明への一試論』東洋文庫を意訳）。

「朝になると、パチパチと音がする。太陽に向かつて人々が拍手を打ち、恭しく頭を下げて拜んでいるのである。

海辺では、漁舟の舳先に立って、のぼる朝日に向かつて拍手を打ち、拜んでいる若い漁夫の姿がある。山頂では、いち



ばん高い岩塊に陣取つて東に向かつて拍手を打ちながら、祈りを捧げている登山巡礼者の姿がある。たぶん一万、いや二万年前から、みなこのようにして『お天道様』を礼拝したのであろう……」

庭先や海や山頂で、人々が日の出とともに太陽に向かつて拍手を打ち、礼拝している姿がいきいきと描かれています。当時の人々は、太陽だけでなく、山や木

や石や井戸やかまどにも神が宿ると信じていました。その姿を見て、ハーンの中に「神国日本」という発想が生まれたのです。かつての日本は祈りの国であり、日本人は祈りの民でした。

どんなに文明が発達しても、人間は自分の手で、太陽、大地、水、空気などを創り出すことはできません。その意味で、私たちは偉大な大自然の恵みの中で生かされていると言えます。古来、日本人はそのような恵みに対して、感謝の気持ちを込めて敬虔な祈りを捧げてきたのです。祈りは、生かされている喜びを実感することであり、大自然をはじめ祖先や先人、恩人たちのおかげを知ることではないでしょうか。

# 暮らしの中に祈りを

一九二二年にノーベル生理学・医学賞を受賞したフランス人医師、アレクシー・カレル博士（二八七三～一九四四）は、祈りに着目し、「祈る人たちの間には、義務と責任の感情があり、嫉妬と意地悪さは弱まり、他人に対する善意が見られるのが特徴である」（『ルルドへの旅・祈り』中

村弓子訳、春秋社刊）と述べています。「祈り」は、心に好ましい影響があるようです。日本語の「いのり」という言葉の語源は、「生宣り」だと解釈されています。人生にはいろいろな悩みや難問が待ち受けていますが、「自分はめげずにがんばって生きるぞ！」と宣言することが、「祈り



自分には  
めげずに  
がんばって  
生きるとぞ



（生宣り）です。自分に宣言をすること  
とで、心は積極的に問題に向かっていけ  
るようになるはずですよ。

自分の幸せのために祈るだけでなく、  
人の幸せのために祈り、大自然に感謝の  
気持ちを込めて祈る。毎日の暮らしの中

に、そのような祈りの習慣を取り入れて  
みてはいかがでしょうか。

そうした気持ちや習慣を持ち続けてい  
くことによつて、いつそう喜びに満ちた、  
豊かな人生を歩んでいくことができるに  
違いありません。